



### 割れ窓の理論

北海道技術士センター 会長  
技術士（建設部門）

伊藤 昌勝

技術士は、各自の分野では専門家である。様々な活動を通じて、お互いに未知の分野を学び合う機会は多い。それでも、技術の枠に留まった話になる。技術は社会の隅々で生かされて初めて意味がある。そのためには、技術の枠を超えた世界との知的交流が欠かせない。そのような取組の一つとして、生体肝移植の実情をお聞きした。

お医者さんの立場からは、技術士の存在自体が初耳のようである。冒頭、技術士の皆さんに、病院で普通に行っていることを紹介するだけでよいのだろうか、との問い掛けがあった。謙遜というより、理論と技術に対する満腔の自信が伝わってくる。講演では、淡々と病巣を切り分ける動画が、パワーポイントで映し出される。全く出血と言うものが無い。生身の人間にメスが入っているのに、不思議にその感慨が湧かない。施術がスマートなのである。ITの発達で、予め患部が3D画面で把握できていることも、その理由の一つなのだろう。

日本では、伝統的な生死観もあって脳死などの臓器移植に多くが頼れない。この事情が、代替としての生体肝移植の技術を高めたようだ。しかし、そのためには健康な身体にもメスを入れることになる。そこのところが何時も心のブレーキになると言う。人体の毀損は、必要最小限しか許されない。高い技術が十分な倫理観にも裏打ちされている。

筆者は、土木技術者と言うことになっている。常日頃から、土木事業は地球の手術だと思っている。お医者さんと同じように、手術が成功して、社会が若々しく躍動的になるを見るのが最大の喜びである。そのためには、心ならずも原始自然にメスが入る。場合によっては、美しい景観に醜い傷跡も残る。いざメスを入れてみると、予想外の病巣に突当る時もある。トンネルやダム工事などでは、むしろそ

のケースの方が多いかもしれない。

出血を少なく傷もできるだけ小さくするのが、理論と技術である。その意味では、土木の世界も格段の進歩が見られる。自然への影響を最小限にする技術に挑み、多くの成果を見ている。過去に残した傷も、その修復に努力が傾けられている。

さて、技術立国の土台が揺らいでいると言う。学力低下や理科離れなど、心配は将来を担う若者へ向けられている。しかし一方では、ツールとしてのITのあまりに激しい進歩が、困った現象をもたらしている。若者が難なく使いこなす反面、ベテランには敬遠感が隠せないからだ。これが、実践を知る者と学ぶ者の技術の伝承を、ギクシャクしたものにしていく気がしてならない。

恐らく、生身の体と心が基本である医療の世界でも、長い間人間そのものを見てきた人達と、最新の技術を扱う人達に、乖離があるのではないだろうか。人体の奥や地の底がバーチャルに見られることと、人も地球も何十億年来の法則に従って生きていることを、キチンとわきまえなければ、問題の本当の解決は難しい。事故の度に、基本が忘れられていると指摘があるのは、このことだと思う。

割れ窓の理論をご存知だと思う。ニューヨークで治安回復のコンセプトになった、あれである。犯罪の芽は、小さな違法を潰すことで摘みとると言うもの。治安対策は、割られた窓ガラスを確実に修復することから始められた。

もし、技術立国に翳りが生じているとすれば、「読み・書き・そろばん」という極めて基本的な窓が、割られたままになっているからではないか。技術士が自己啓発に努めるのは当然である。これと併せて、身の回りの割れ窓を、地道に修復して行くことも大切な役割だと思う。